

奥の細道

旅立ち

【本文】

月日は百代の過客(読み)にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ(職業)、馬の口とらへて老いを迎ふる者(職業)は、日々旅にして旅を栖(すみか)とす。古人も多く旅に死せるあり。

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年(読み)の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に(表現技法)、白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず、ももひきの破れをづづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月まづ心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別所に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

面八句を庵の柱にかけおく。

【現代語訳】

月日は永遠に終わることのない旅人のようなものであって、来ては去り、去っては新しくやってくる年もまた旅人である。船頭として船の上で生涯を過ごす人や、馬引として年をとっていく人にとっては毎日が旅であって旅を住処としているのだ。昔の人も、多くの人が旅をしながら亡くなっている。

私もいつの頃からか、ちぎれ雲が風に誘われて行くように流浪の旅をしたいという気持ちがおさまらずに、最近では海辺をさすらってはいた。去年の秋に川のほとりの古びた家に戻って、(留守にしておいた間にできていた)蜘蛛の巣をはらい腰を落ち着けた。年もだんだんとくれてきて春になったが、霞だちたる空を見ると、「今度は白河の関を超えたい」と、そぞろの神が私の心に取り憑いてそわそわさせ、しかも道祖神が私を招いているような気がした。股引(ももひき)の破れているのを繕って、笠の緒を付け替えて、三里(膝のつぼ)にお灸をしたところ、松島の月はどのようになっているのだろうかと思わず気になったので、住んでいた家は人に譲って、杉風の別荘にうつると、次のような句を詠んだ。

このわびしい芭蕉庵(江上の破屋)も住人が変わることになって、雛人形が飾られる家になることであろうよ。

この句を芭蕉庵の柱に掛けておいた。

【重要語句】

百代の過客…永遠にとどまることなく旅を続ける旅人

古人…芭蕉が尊敬していた日本の西行や宗祇、中国の李白や杜甫のこと。

予…われ

さすらふ…さまよい歩く

江上の破屋…隅田川のほとりにある芭蕉庵を指す

三里…膝のツボのこと。ここにお灸をすると、足が丈夫になるとされる。

【芭蕉の人生観】※頻出

人生とは旅のようなものである。

【対句＝似た言葉、文を並べて印象付ける方法】

- ①「月日」は「百代の過客」にして
「行きかふ年」もまた「旅人」なり
- ②「舟の上に」「生涯を浮かべ」、
「馬の口とらへて」「老いを迎ふる」
- ③「そぞろ神」の「ものにつきて」「心を狂はせ」、
「道祖神」の「招きにあひて」「取るもの手につかず」
- ④「ももひきの破れ」を「つづり」、
「笠の緒」「つけかへて」

【俳句のポイント】

草の戸も 住み替はる代ぞ 雛の家

芭蕉は今まで住んでいた庵を人に譲るにあたり、主が変われば庵も変わるだろうという気持ちを読んでいる。世捨て人の自分と違って家族のある人が新たな主となれば、雛も飾られるような華やかな庵になるだろうというのである。

行く春や 鳥啼き魚の 目は涙

過ぎゆく春の哀愁を鳥や魚に託して読んでいる。春を惜しんで鳥は啼き、魚の目には涙が浮かんでいるように見えるというのである。この春を惜しむ気持ちには、親しい人々と別れる悲しみも重ねられている。

※季語・季節・切れ字・表現技法をおさえておくこと

平泉

【本文】

三代（誰のこと？）の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。

まづ高館にのぼれば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐるて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても 義臣 すぐつてこの城(同じもの)にこもり、功名一時のくさむらとなる。

「国破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落としてはべりぬ。

夏草や 兵どもが 夢の跡

卯の花に 兼房見ゆる 白毛かな (曾良)

※季語・季節・切れ字・表現技法

【現代語訳】

三代にわたって栄えた藤原氏の栄華も一睡の夢のように消え、大門のあとは一里ほどこちらにある。秀衡が住んでいた場所は田んぼになっていて、金鶏山ばかりが昔の形をのこしている。

まずは高館に登ると、(眼下には) 南部から流れてくる北上川という大河が見える。衣川(という川)は、和泉の城をまわって流れ、高館のところで大河(北上川)に合流をしている。(秀衡の息子の) 泰衡が住んでいた所は、衣が関を隔てたところにあり、南部から平泉に入ってくる道を固めており、蝦夷の侵入を防いでいたと見える。それにしても、義経は選りすぐった家臣たちとこの高館の城に立てこもり、この場所は一時の高名をたてたけれど、今は草むらとなっている。『都が戦に敗れても山河は残っており、都に春の季節がやってきて草や木が生い茂っている』と杜甫が詠んだ句を胸に、笠をおいて、しばらくの間、涙を流したのであった。

昔、武士たちが栄誉を求めて戦ったこの場所には今、夏草が生い茂っており、昔のことは夢のようにはかなく消え去ってしまったことだよ。

夏草に混じって咲いている白い卯の花を見ていると、兼房が、白髪をふり乱して敵に向かう姿が浮かんでくることよ。(曾良作)

【ポイント】

「自然の偉大さと人間のはかなさ」



立石寺(読み)

【本文】

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基にして、ことに清閑の地なり。一見すべきよし、人々の勤むるによつて、尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。

日いまだ暮れず。ふもとの坊に宿借りおきて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年ふり、土石老いて苔なめらかに、岩上の院々扉を閉ぢて、物の音聞こえず。岸を巡り岩をはひて、仏閣を拝し、佳景寂寞として心澄みゆくのみおぼゆ。

閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声
※季語・季節・切れ字・表現技法

【現代語訳】

山形領内に、立石寺という山寺がある。慈覚大師が開いたお寺で、まことに清らかで静かな土地である。「一度は見てみたほうが良い」と人々にすすめられたので、尾花沢から引き返してきたのであるが、その距離は七里ほどである。

日はまだ暮れていない。山のふもとの宿坊に宿を借りて、山上にあるお堂に登っていく。岩に巖が重なって山となり、松や柏の木は年齢を重ね、土や石も年が経って苔がなめらかに覆っており、岩の上に建てられたお堂の扉は閉じられていて、物の音が聞こえない。崖のふちをまわって、岩をほうようにして登り、仏閣を拝んだのだが、すばらしい景色は静寂につつまれ、自分の心が澄んでいったことだけが感じられる。

辺りは静けさに静まり返っている。(あまりにも静かすぎるので) そんな中で聞こえてくるセミの鳴き声も、岩にしみっていくようだ。

【その他の俳句】

旅に病んで 夢は枯野を かけめぐる

(意味)

旅の途中で病に倒れてしまっても、夢中ではなお枯野をかけめぐっている。

辞世の句…死ぬ間際に呼んだ歌

蛤の ふたみに別れ 行く秋ぞ

(意味)

離れがたい蛤のふたと身が別れていくように、お別れの時が来た。私は二見浦へ旅立っていく。もう秋も過ぎ去ろうとしている。